

日 本国内の世界遺産は93年の「法隆寺地域の仏教建造物」の指定を皮切りに、現在まで全国14カ所が登録されている。なかでも記憶に新しいのは、07年の「石見銀山遺跡とその文化的景観」や05年の「知床」の自然遺産などである。また、次期の登録を目指す世界遺産登録暫定資産は8件で、「富岡製糸場と絹産業遺産群」「富士山」などが地道な運動を進めている。しかし、世界遺産に指定された地域の実態から、登録イコール集客継続拡大につながっているかと言えば実態はそう甘くはない。

知床を例に取れば、05年の登録時には爆発的人気の中で173万人だった観光入込客数は08年には131万人に落ち込んでいる。世界遺産に限った話ではないが、あらためて日本人の話題性がある観光要素への「飛びつき反応」の強さと、「冷めやすい旅客心理」が見て取れる。

そんななか、世界遺産登録地の中でも持続可能な集客システム構築を目指し、新たな仕掛けづくりを着々と進めている人たちがいる。04年に世界遺産登録を受けた「紀伊山地の霊場と参詣道」を活動ベースにした和歌山健康センター「熊野で健康ラボ」の活動である。ご当地の世界遺産登録の範囲は広域に渡り、和歌山・三重・奈良の各県の紀伊山地に点在する熊野三山と呼ばれる、高野山・吉野大峯の三つの霊場とそれらを結ぶ修行の道である参詣道が舞台となる。

今回は健康ラボの責任者である木下藤寿さんとのご縁で久しぶりに熊野古道を訪れることになった。現地では彼らが手塩にかけて開発したプログラムを視察し、2日間にわたり「熊野古道語り部の会」の解説付きで約10kmを歩いた。

そこで実感したのは、やはり歴史的なストーリーを学び体験すると、深い味わいを持った旅に変わるということだ。彼らがつくりあげる熊野古道への旅は、まさに日本人の「たび」のルーツ（原点）を

探求できる内容。和歌山県では「環境と調和した世界遺産の保全と活用」と題し、世界遺産の保全とウォーキングによる健康づくりや癒やしに結びつける活動を推進しており、「熊野で健康ラボ」は旅の楽しさを損なうことなく、健康づくりや癒やしに結びつける新たなプログラムとして仕上げている。

また、旅客を受け入れるためのコーディネーター役である「熊野セラピスト」の育成や「熊野本宮語り部の会」のガイド技術の向上なども地域と連携して行っている。

もうひとつの注目は、本格的なヘルスツーリズム

への真摯な取り組みである。温泉医療の専門家として名高い富山大学の宮地正典先生の指導のもと、健康づくりにかかわる各種データを収集分析。熊野ウォーキングの癒やし効果を科学的に検証し、日本最古の温泉とされる「つば湯」で有名な湯の峰温泉や、川に穴を掘れば温泉がわき出ることので人気の川湯温泉などの温泉資源を熊野山脈の高低差を利用した気功療法と融合させ、熊野本来の魅力をヘルスツーリズムの観点からプログラムにしている。さらに地元観光協会に勤務していた内野久美さんが観光活性化への思いから、昨年熊

野観光社を開業し第3種旅行業登録。「熊野で健康ラボ」のプログラムを着地型商品として受け入れる基盤も整い、旅行会社と提携することになった。

熊野も他の世界遺産登録地同様、当初は多くの観光バスを連ねて観光客が押し寄せた。しかし、熊野古道の入り口だけ見て帰るといった休憩立ち寄り型パターンが大半。これではせっかく熊野まで足を運んでも、熊野が持つ歴史的意味や山懐深く鎮座する紀伊山脈の霊場独特の「氣」すら感じることなく帰ることになる。他のほとんどの登録地はこの登録当初のバブル集客に溺れ、地域資源を磨く努力をしてこなかった。旅行会社の発地型商品造成の限界が叫ばれる今、熊野が新たな旅行業のビジネスモデルになる予感がする。

地域活性化 伝道師が行く

文・篠原靖



熊野古道中辺路で木下さん(左)宮地先生(右)と

vol.
15

世界遺産を舞台にした ヘルスツーリズム

しのはら・やすし ●81年東武トラベル入社。05年から企画仕入部副部長として観光素材の発掘・旅行商品化を手掛ける。この実績から07年、内閣府地域活性化伝道師に任命。